

# 新体操 魂



MAI YAMAWAKI



ロングインタビュー

「再生の始まり」山田小太郎 ( 国士舘大学監督 )

クローズアップ

山脇麻衣 ( 町田R G / 早稲田大学 )

2012 ALL JAPAN REPORT

青森大学、団体・個人ともに制す！

第3号

2012 総まとめ号

AOMORI  
UNIVERSITY



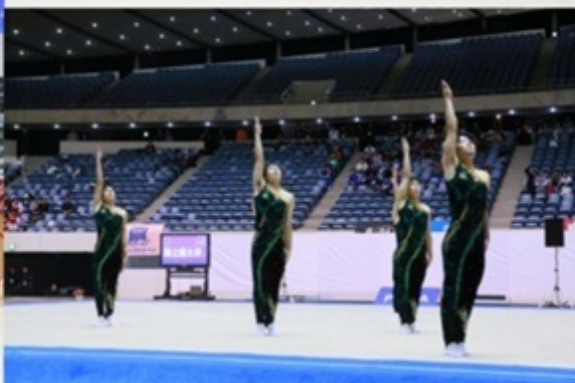
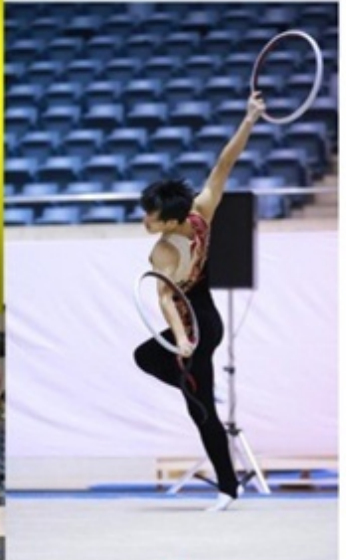
KOKUSHIKAN  
UNIVERSITY



PHOTO by 榎原 嘉徳  
清水 綾子  
2013/2/28 発行



**2012  
ALL JAPAN  
R.G.CHAMPIONSHIPS  
REPORT**  
2012.11.16~18  
於・国立代々木第一体育館



## 女子優勝/ 山口留奈(イオン)



(C)Yoshinori SAKAKIBARA

## 長いトンネルを抜けて～値千金の優勝

第65回全日本新体操選手権大会の女子の覇者となったのは、山口留奈(イオン)だった。2011年に続いている連覇だから想定内の優勝だったように見えるが、決してそうではなかった。2012年の山口は、いつ崩壊してもおかしくないような不安定さを試合のたびに露呈していた。1月にロンドンで行われたテストイベントを皮切りに、インカシでもクラブ選手権でもずっとどこか委縮したような演技を見せることが多かった。

ロンドン五輪の個人出場枠がかかったテストイベントで、今までに経験のないような大きなミスを連発し、ここ一番で大崩れをした自分のことが信じられなくなっていたと山口は言う。それからかつて経験したことのない「試合が怖い」という気持ちを持つようになり、試合に対して前向きになれなくなった。1年前までの「メンタルの強い山口」とは別人。それが2012年の山口留奈だった。

それでも、イオンカップあたりからやっと怖がらずに演技ができるようになってきて、全日本には間に合

った。「試合が怖いという気持ちは、試合をやっていく中でしか解決できないと思っていた」と、やり続けてきた山口は、ひと回りたくましくなったのだ。

2013年は、再びディフェンディングチャンピオンとしてシーズンを迎えることになるが、全日本後に、山口はこう言った。

「新ルールに変わり、自分の強みをもっておかないと勝つことは難しくなると思う。でも、新体操を続けていくうえで、勝つこともたしかに大切ですが、私はお客さんから“この演技、好き!”と言われる選手になりたいです。人がやっていないような技、見ていてドキドキするようなリスクな技を決めていく。そんな演技ができるようになりたいです。」

## 男子優勝/ 松田陽樹(青森大学)



(C)Yoshinori SAKAKIBARA

## 最後に開花した遅咲きの星

高校時代は、国体のために練習したクラブだけしか個人の演技をした経験がなかったという松田陽樹は、全日本チャンピオンに名前を連ねる選手の中では、とびきりの遅咲きと言えるだろう。

全日本3日間の日程が終了した後で、話を聞いたときも、「今まで結果を出したことがなかったので、ま

だ実感がないです。自分にとっては最後の新体操の大会だったので、このうえなく満足しています。」と、まだ信じられないといった面持ちだった。

大学卒業後は、青森大学出身のメンバーで活動している「BLUE TOKYO」に入りたいと考えているそうで、「新体操は、この全日本で終わり」と決めていた。だから、自分が一番好きな基本徒手の美しさをしっかり見せる演技にこだわってきたと言う。それが、優勝という大きな実となった。

練習ではなかなかまとまらなかった種目も、全日本の本番では驚くほど決まり、点数を見て自分でも驚いたという松田。「インカレチャンピオンの菅選手が出ていなかったり、ラッキーな面もありました」と言うが、その謙虚さがあったからこそ、勝利の女神も彼に微笑んだのだろう。

女子準優勝/  
穴久保璃子(イオン)



(C)Yoshinori SAKAKIBARA

「軸足の感覚がなくなるほどの痛み」を左足の甲に抱えていたという穴久保璃子だが、演技中にはまったくそんな風には見えなかった。

「同じクラブからもたくさんの選手が全日本には出たので、負けたくない気持ちもあったので、足が痛くてもやると決めたからには、痛みを言い訳にしたいと思っていました。」

強くなった。本当に彼女は強くなった。「負けたくない」という言葉を堂々と使い、痛みにも打ち克つ、そんな強さを出せるようになった。大学4年生の穴久

保は、現役続行するかどうか、考え中だと言った。ただ、やるとしたら「全日本の頂点を目指してやる」とも言った。おそらく、もうしばらくは私たちを楽しませてくれるのではないだろうか。

男子準優勝/  
木村 功(清風RG)



(C)Yoshinori SAKAKIBARA

2012年から清風中高校で教職に就いた木村功は、1週間ほとんど空き時間がないほどの過密スケジュールをこなしている。授業、授業準備、部活の指導。そこに自分の練習が入り込む余地はほとんどなかった。全日本前に、抱負を聞いても「練習する時間がとれないので」と自信なさそうな答えしか返ってこなかった。だから、準優勝という結果は、上出来と受け止めているかな、と思いきやそうではなかった。

「何%満足ですか？」と聞くと、「全然満足じゃないです」と木村は言った。リベンジに燃える彼の演技を2013年も見られることを期待したい。

女子3位/  
三上真穂  
(東京女子体育大学)



(C)Tatsuya OTSUKA

東日本インカレ優勝という鮮烈デビューに続いて、インカレでも限りなく優勝に近い準優勝と快進撃を続けた三上真穂は、全日本でもやはり強かった。1年生ならではの活きのいい演技で駆け抜けた2012年。2013年は真価が問われる年になりそうだ。

男子3位/  
斉藤剛大(国士舘大学)

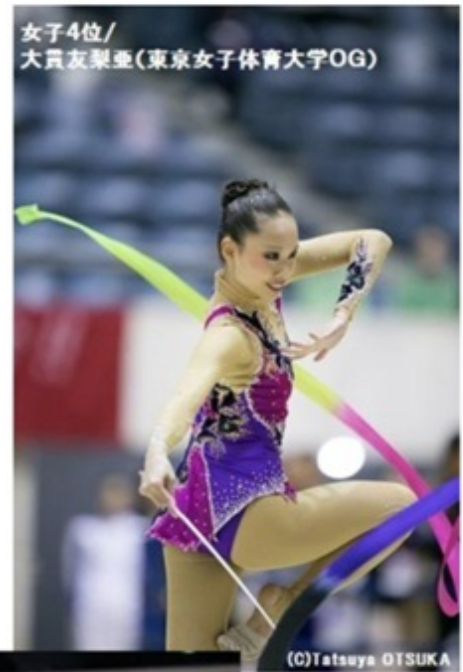


2011年、斉藤剛大は、「元気いっぱいの1年生」で、なんと全日本の種目別決勝に4種目とも残って周囲を驚かせた。2012年は、「相変わらず元気な2年生」になり、当然のように4種目とも決勝に残り、ついに個人総合でメダルまで獲得してしまった。果たしてこの「新体操大好き小僧」はどこまで成長するのか？ 楽しみにたまらない。

男子5位/  
臼井俊平(済美高等学校)



女子4位/  
大貫友梨壘(東京女子体育大学OG)

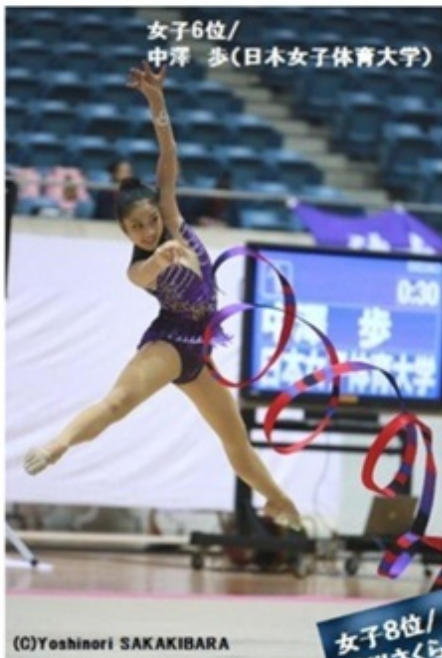


男子4位/  
福士祐介(アルフレッサ日産産業)



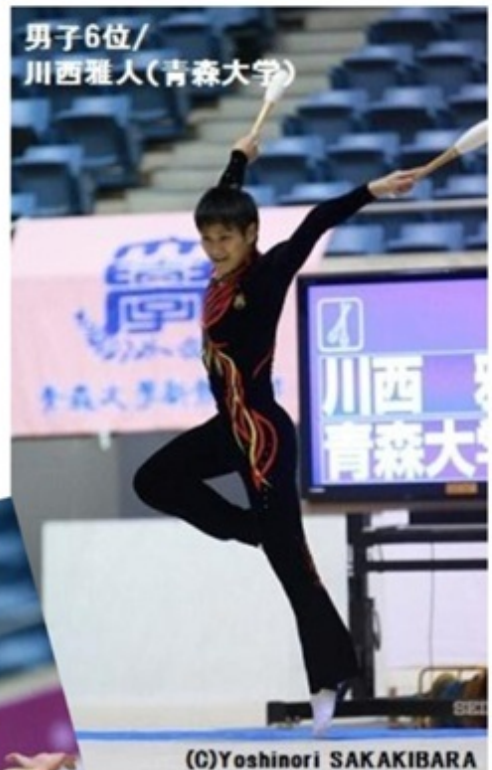
女子5位/  
皆川夏穂(イオン)





女子6位/  
中澤 歩(日本女子体育大学)

(C)Yoshinori SAKAKIBARA



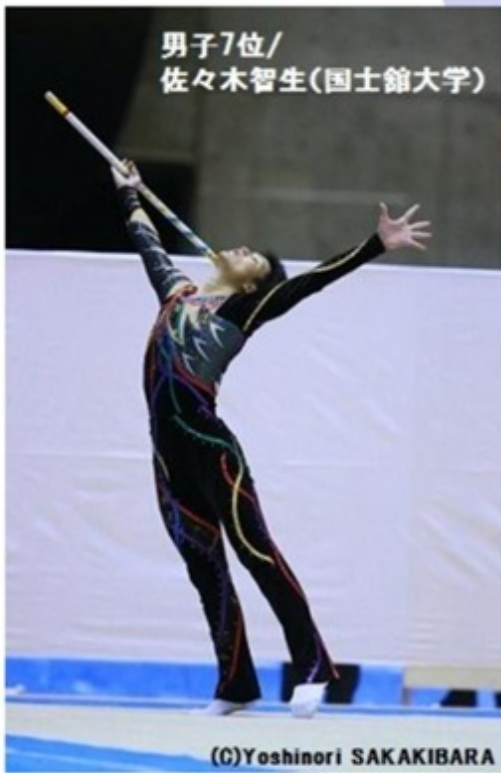
男子6位/  
川西雅人(青森大学)

(C)Yoshinori SAKAKIBARA



女子8位/  
早川さくら(イオン)

(C)Yoshinori SAKAKIBARA



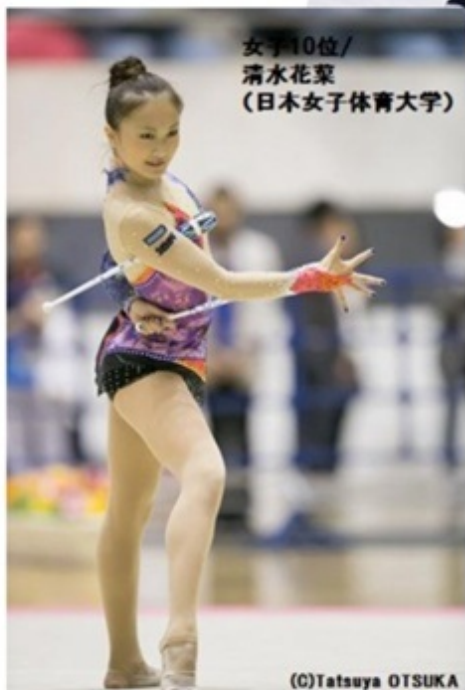
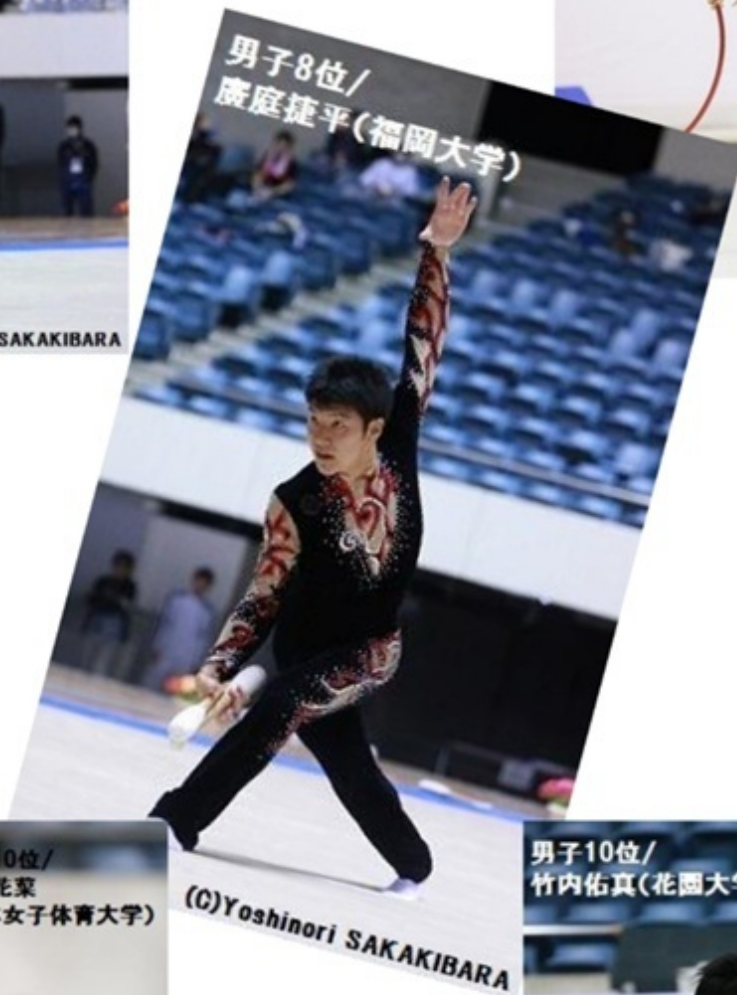
男子7位/  
佐々木智生(国士館大学)

(C)Yoshinori SAKAKIBARA



女子7位/  
三沢真希(日本女子体育大学)

(C)Yoshinori SAKAKIBARA





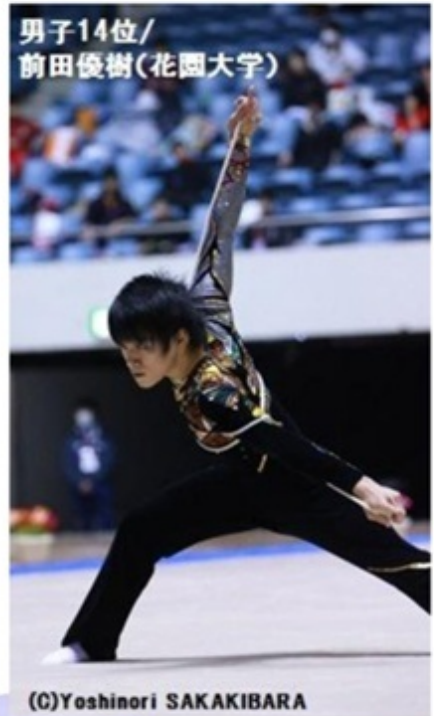


女子14位/  
コン・ユン(金蘭会高等学校)



(C)Yoshinori SAKAKIBARA

男子14位/  
前田優樹(花園大学)



(C)Yoshinori SAKAKIBARA

男子15位/  
弓田速未(国士館大学)



(C)Yoshinori SAKAKIBARA

男子15位/  
永井直也(青森山田高校)



(C)Yoshinori SAKAKIBARA

女子15位/  
鈴木志帆(サンシャインR.G)



(C)Yoshinori SAKAKIBARA

女子においては、全日本選手権個人総合が世界選手権およびユニバーシアードの第一次予選を兼ねており、16位/佐々木南海(飛行船新体操クラブ)、17位/宮本枝実(飛行船新体操クラブ)、18位/藤岡里沙乃(みやび新体操クラブ)、19位/宮本望来(イオン)、19位/中津裕美(東京女子体育大学)までが2013年4月20~21日に行われる世界選手権代表第2次選考会/アジア新体操選手権大会・ユニバーシアード日本代表決定競技会への出場権を獲得した。



男子団体優勝：青森大学

(C)Yoshinori SAKAKIBARA

若い新監督就任で、どうなるかと思われた青森大学だが、終わってみれば 2012 年も全勝！ その牙城は崩れなかった。従来の美しく、重みのある体操に加え、スピード感やシャープさを増した青森大学は、やはり絶対王者だった。果たして打倒青大！ を成し遂げるチームはいつ現れるのだろうか？

2012 年全日本選手権の女子団体競技は、じつに熾烈な戦いだった。

総合優勝には、東京女子体育大学が振り返り、日本女子体育大学の 3 連覇を阻止したが、ポールでは東女が 0.2 差で勝ち、リボン&フープでは 0.075 日女が上回り、2 種目合計で 0.125 差という史上稀に見る接戦を繰り広げたのだ。

2 校は、大会 3 日目に行われた種目別でもお互い一步も引かず、ここでも東女がポール、日女がリボン&フープと優勝を分け合う結果となった。

2010 年の全日本選手権で日女が歴史的勝利をおさめるまで、女子の団体競技は、東京女子体育大学の独壇場だった。あのころの東女は、憎らしいくらいに



女子団体総合優勝：東京女子体育大学

(C)Yoshinori SAKAKIBARA

強く艶やかだった。しかし、死にもの狂いで女王の座を奪還した今年のチームもまた強く、美しかった。

こうして 2 校が手に汗にぎる優勝争いを展開するようになってから、女子の団体は、試合として俄然おもしろくなってきた。

五輪や世界選手権の代表にはフェアリー JAPAN が決まっているという状況であっても、モチベーションをおとすことなく研鑽できるのは、この 2 校の意地のぶつかり合いがあってこそ、なのかもしれない。

こういう厳しい競争でもまれてこそ、得られる強さがきっとある。そして、これでこそ「スポーツ」だと言えるのではないだろうか。



女子団体総合準優勝：日本女子体育大学

(C)Yoshinori SAKAKIBARA



男子団体準優勝：国士館大学

(C)Yoshinori SAKAKIBARA

予選では細かいばらつきがあり、5位スタートとなった国士館だが、決勝では起死回生のパーフェクト演技で一気に順位を上げた。「予選はいい出来ではなかったが、それでも19点にのったことで勇気づけられた。」と団体キャプテンの水本賢。ポジティブ思考で勝ちとった久々の準優勝だった。

上位2チームの激戦は、凄まじかったが、じつは3位の武庫川女子大も、かなり上位に迫る勢いだった。とくに、ボールはとびきりリスクな構成になっており、観客をわくわくドキドキさせるエキサイティングな作品で、種目別決勝では24点台をマーク。2位日女に0.375差まで迫った。1年生も多い若いチームだけに今後も脅威となりそうだ。



女子団体総合3位：武庫川女子大学

(C)Yoshinori SAKAKIBARA

インターハイでは連覇を逃した井原高校だが、その雪辱を果たすかのように全日本では予選、決勝ともほぼノーミスの演技。徒手能力の高さ、美しさは全日本という舞台で、いちだんと輝きを放っていた。大きくメンバーが変わる2013年も目が離せないチームだ。



男子団体3位：井原高等学校

(C)Yoshinori SAKAKIBARA



女子団体総合4位：国士館大学

(C)Yoshinori SAKAKIBARA



男子団体4位：福岡大学

(C)Yoshinori SAKAKIBARA



男子団体5位：青森山田高等学校

(C)Yoshinori SAKAKIBARA



女子団体総合5位：名古屋女子大学高等学校

(C)Yoshinori SAKAKIBARA



男子団体総合6位：花園大学

(C)Yoshinori SAKAKIBARA



エキシビジョン

16:47

©Yoshinori SAKAKIBARA



女子団体総合6位：佐賀女子短期大学付属佐賀女子高等学校

(C)Yoshinori SAKAKIBARA



©Yoshinori SAKAKIBARA

大会を締めくくったのは、社会人大会に出場し大きな話題をよんだ一千会の団体演技だった。メンバーの一人にハンデキャップがあるということも、全員揃っての練習がほとんどできてないことも感じさせない一体感のある素晴らしい演技に、会場中から大きな喝采がおくられた。まさに「新体操が繋ぐ絆」を体現した演技は、新体操に関わるすべての人の胸を熱くさせるものだった。

ロングインタビュー

# 「再生の始まり」



## 山田小太郎

(国士舘大学監督)

団体＝総合2位

個人＝3位・斉藤剛大、7位・佐々木智生、11位・水島勇貴、15位・弓田速未、26位・畠山可夢

これが2012年度全日本新体操選手権大会における国士舘大学の成績だ。

以前の国士舘大学は、「超・強豪」であり、「常勝軍団」だった。そのころを国士舘のあるべき姿だとするのなら、この成績で喜ぶわけにはいかない。

が、しかし。

1年前のことを思えば…。

いやここ数年のことを思っても…。

2012年全日本を終えたとき、国士舘大学の選手達には概ね満足気な空気が漂っていた。「これで満足してはいけない」とは誰もが思っていたであろうが、それでも、頂点を目指して進む険しい道のりの途中で、前方の視界が開け、頂きが見えた！ そんな手ごたえ

を感じていたのではないかなと思う。

その思いは、監督である山田小太郎も同じではなかったか。

ずっと順風満帆とは言い難い。

ときには後退することもあり、選手も監督も涙にくれることもありながら、それでも、着実に少しずつ、自分達の「いるべき場所」への歩みを進めている。今の「国士舘大学」は、そんなチームであり、2012年は、上昇の軌道がはっきりと見えた年だったように思う。



そんな2012年を振り返り、「これからの国士館大学」の展望、そして目指すところを、山田監督が語った。

## 苦んで苦んで、シーズン最後に会心の演技ができた！～団体

……2012年は、国士館にとって「いい年だった」と言ってよいのではないかと思います。どう感じていますか？

「そうですね。団体に関しては、2位で喜んではいけないとは思いますが、今回は、前に進める2位だったように思います。個人も、全日本では力を出し切れず悔しい思いをしている選手もいますが、全体としてはたしかに前進できたという感触はあります。」

……2011年の全日本は、団体でのアクシデント（決勝演技中に選手が負傷）もあり、かなり悔しい思いで終わったと思いますが、それが今年の躍進の原動力になった面はありますか？

「たしかにあのときは、かなり落ち込みました。アクシデントが起きてしまったのは、選手ではなく私の責任だと思いました。なぜ起きてしまったのか？それを防ぐために自分がやるべきことがもっとあったのではないかと考えては、自分の指導者としての至らなさも大いに感じた年でした。」

それでも、終わったことを悔やんでも仕方ないので、このことをプラスに考えあとはもう上がるしかない！とポジティブに考えるようにはしていました。」

……結果、2011年は団体総合8位となり、もはや「背水の陣」で挑んだのが2012年だったと思いますが、年度最初の試合・東日本インカレでは、本番でのミスもあり、青森大学A、Bチームに次いで3位でした。

「東日本インカレに向けては、チームの状態はかなり



よかったんです。春先にデンマーク遠征があったので、作品も例年よりかなり早く仕上がっていて、人前で演技



する経験も積んだ状態で、東を迎えることができました。直前の通しても実施もかなり安定していたので、正直、いける！という思いはあったのですが、試合本番での演技だけがダメで、これにはかなりへこみました。

しかし、冷静に振り返ってみれば、今年こそ！という思いは自分を含め、みんなにあったと思うし、頑張っていたことは間違いのないのですが、私が指揮棒を振り間違えたんだな、と感じました。監督は、オーケストラなら指揮者なわけですから、私が指揮を誤れば、つられる奏者は出てきて当然なんだと。自分自身の詰めの甘さを実感した試合でした。」

……さらに、全日本インカレでは、青森大学、花園大学、さらに福岡大学にも後れをとっての4位。

「インカレは、準備段階から今ひとつでした。テストや怪我で、なかなかフルメンバーで練習できなかったりもして、“まとめよう”とする演技になってしまったと思います。その結果、大きなミスはなくても点数



が伸びないという演技になってしまい、それが結果に反映してしまいました。」

……インカレが終わってから、全日本に向

けて、団体に関しては、どう立て直しを図ったんでしょうか？

「全日本では、選手達が自分で納得できる演技をしてほしいと思ったので、本当に彼らがやりたいことを、やりやすい方法でできるように、と考えました。」

そのため、4年生の篠原良太に団体のチームリーダーを任せました。私はサポートに回り、団体の練習はほとんど篠原がメインで見えるようにしました。選手達も、私に対してよりは篠原だと意見も言いやすいようでしたし、篠原も、選手達と私のパイプ役を非常によくやってくれました。自発的に練習量も増えて、イ



ンカレ前の3倍はやっていたんじゃないでしょうか。全日本が近づくにつれて、練習の雰囲気や選手達の様子を見ていて、たとえ全日本の結果がどうなったとしてもこのやり方で間違いなかったな、と感じることができました。」

……全日本でも、予選では細かいミスもあり、5位という結果でしたが、そのとき、不安はありませんでしたか？

「予選の日の夜のミーティングで、団体メンバーで4年生の熊沢太地が、最後に“メダル、持って帰ろう！”と言ったんです。チームの雰囲気も明るかったし、これなら大丈夫だ！と思えました。

実際、決勝の日は、公式練習から動きもよくて、選手達の気持ちが決まったな、と感じました。予選の結果も引きずってないし、動揺もなく、いい雰囲気でした。」

……決勝での演技は、かなり会心の出来ではなかったですか？

「そうですね。よかったです。篠原と並んで正面から見えていたんですが、終わったとき、思わず握手してました。本当は2位で喜んではいけないんですが、試合は最後まで分からないという経験をさんざんしてきたので、正直、嬉しかったです。選手も、篠原も本当によくやってくれたな、と思いました。今回のメンバー



たので、正直、嬉しかったです。選手も、篠原も本当によくやってくれたな、と思いました。今回のメンバー

には、2011年の全日本 のときに演技中に怪我をした小川悟（3年）も入っていたんですが、演技が終わってから彼が本当にいい笑顔を見せてくれたので、それもとても嬉しかったです。」



## 「次こそ頂点！」の手ごたえをはっきりつかんだシーズン～個人

……個人に関しては、2012年はどの試合も、よい結果を残すことができたように思いますが、この躍進の理由はなんだと思いますか？

「個々の選手を見れば、浮き沈みはありましたが、誰かがダメでも、ほかの誰かが踏ん張るというチーム力は発揮できたように思います。

個人は、低迷していた時期もあり、今の4年生が入学してきたころは、今とはずい分、練習の雰囲気も違っていました。正直、青大や花大と“勝負しよう”という空気が薄れていたように思います。

私が監督になったのが2007年で、2008年の全日本で団体は優勝しましたが、それは、まだ前任の監督の遺産でした。その後は、今は我慢の時だと覚悟を決めて、選手の意識を変えていくことを心がけていました。今の4年生には、入学してきたころから、“一番目指していこう！ 勝負しにいこう！”と言い続けてきましたが、個人のリーダーだった篠原が、それをよく理解して、“みんなで強くなろう”といういい雰囲気を作り上げてくれました。

私の指導は、押し付けたり強制したりはしないので、やる気のある選手はよくても、そうじゃない選手は置いていかれてしまうという面があったのですが、今年の個人は、チームとしてのまとまりがあったので、お互いが引っ張り合って、みんなが頑張っていたと思います。」

……“押し付けたり、強制したりしない”という山田監督の指導の根幹はなんでしょうか？

「一人一人、自分で考える練習をさせています。ある意味、放任に見えるかもしれませんが、うちの個人は、作品の構成も練習の内容や量も基本的に本人まかせです。もちろん、修正点のヒントは与えますが、こうしろ、ああしろとは言わず、自分で考えることを求めます。取り組み方が甘いと思うときには、それを指摘することはありますが、それを聞き入れてやるかどうかは本人次第です。

自分自身、個人の選手だったので、結局、個人はやるもやらないも自分に返ってくるということはよくわかっているので、人から“やらされる”のでは意味がないと思っていますから。ただ、指導歴が長くなるにつれて、選手によってはある程度、“やらせる”ことも必要なんだな、と思うようになってきたので、少し、そういう部分も取り入れたりもしています。ただ、私は、型がないのが国土館のよさだと思っているので、そこを変えるつもりはありません。

これは個人、団体に共通して言えることですが、私は、“自分の好きな新体操を追究できる”のが、国土館だと思っています。」

……その結果が、2012年の個人での躍進（東日本インカレ：2位・斉藤剛大、3位・篠原良太、4位・弓田速未、6位・佐々木智生／全日本インカレ：3位・弓田速未、4位・斉藤剛大、10位・佐々木智生／全日本選手権：3位・斉藤剛大、7位・佐々木智生、11位・水島勇貴）であり、現在の非常に個性豊かな選手達だということでしょうか？

「そうですね。2012年は、欲を出していい年だと思っていましたし、一番を目指していこう、とは



選手にも言っていたので。まだ一番にはなれていませんが、少し近づいてきたかな、という手ごたえはある年でした。

うちの選手達は、本当に、一人一人、まったく色が違うので、そこは監督としても見ていて楽しいですし、それが国土館の良さじゃないかと思っています。」

## 次世代の中核となるような「基本のしっかりした選手」を育てたい！ ～ジュニア

……2012年は、大学生だけでなく、ジュニアも大活躍（団体：関東ジュニア優勝、全日本ジュニア12位／個人選手4名が全日本ジュニア出場）の1年でしたが、ジュニアを育てるうえで、どんなことを心がけていますか？

「新体操を好きにさせること、です。これに尽きます。

新体操を好きになれる環境に子どもを置いて、技術的なことは、基本中の基本の大切なことだけ押さえておく、まずはそれで十分かな、と思っています。うちのジュニア選手達に関しては、こちらの予想

以上に、新体操を好きな気持ちが強くて、練習が休みでも体育館に来てしまう。その気持ちの強さが、結果につながったように思います。

もちろん、コーチ（国土館OBの有田真章）をつけたり、エアマットを購入していつでもタンプリングの練習ができるようにしたり、できる範囲で環境を整えてきたことも大きいです。以前は選手クラスの練習は週3日でしたが、毎日来てもいいようにしたら、ほとんどの子が毎日来て自主練するようになり、大学生の練習を間近に見る機会も増え、学ぶことも多かったと思います。」

……ジュニア達には、どういう選手に育ててほしいと考えていますか？

「体づくりと、正しい徒手体操の基礎をしっかりと身につけた選手になってほしいです。今の高校生でも上にくる選手はしっかり基礎ができているという時代になってきているので、美しい徒手ができる選手作りを目指したいと思っています。高校生の中では井原高校の選手達は本当に基本がしっかりしていて柔軟性もあるし、立つ、座る、走るなどすべての動作が美しい



と感ずます。あのような徒手ができるジュニアを育てることが理想だと思ひます。

今の男子新体操は、多様化している面白さはありますが、井原の新体操を見るとダンスや表現に走りすぎず、やるべきことを徹底していると感じます。うちの選手達に限らず、ジュニア

はやはりそういった方向性を目指してほしいです。すべてのジュニアが正しい基本の体操を大切に育ててきたら、大学生になってからもすごく伸びると思うんです。

うちのジュニア達も頑張っていますが、技術的にはまだまだこれからです。ただ、新体操を好きな気持ちでは一番！と言えるんじゃないか、とそこには自信をもっていますからその気持ちがあればこの先ますます頑張れるんじゃないかと期待しています。とりあえずは2年以内には、全日本ジュニアでも上位に入れるようになる！というのが目標です。今は私の教え子で



国土館高校の監督である大舌俊平と一緒にジュニアを指導しています。団体では、いつかは国土館の代名詞でもある3バック+スワンができればいいな、と思っています。ちょっと欲張りすぎですかね。」

### 新体操への恩返しのため、新体操に貢献できる人生を送りたい

……国土館大学の監督になって6年が終わろうとしています。苦しいことのほうが多い年月ではなかったかと思ひますし、これからまだまだ楽はできないかと思ひますが、それでも、山田監督はいつも明るくポジティブという印象があります。現役だったころと比べると、かなり変わられたんでしょうか？

「すごく変わったと思ひます。大学生のころは、もっと短気でしたし、ビリビリしていました。よく後輩にも怒鳴っていましたね…

それが指導者になってからは、自分でも驚くほど気が長くなりました。やはり、指導者は忍耐力が必要だ



と思っているんで、自分の思うようにいかずに落ち込んだり、腹が立ちそうなときでも、すべてが勉強と思うようにしたら少しずつ我慢できるようになりました。ずっといい時ばかりではない、ということもこの6年間で学んできたので色んなことに“耐えられる性格”にはなったように思ひます。

私にとって、新体操は『恩人』なんです。自分の人生も考え方も価値観も、このスポーツに出会ってから大きく変わったと思っています。だから、私はこれから先も新体操のためになることをやっていく人生を送りたいし、それが新体操に対する恩返しだと思っています。

すぐには勝てるチームにはならないかもしれない。もっと時間がかかるかもしれない。でも、それでもずっとそこにいる。地味でも絶対にいる、という存在でいたい。もちろん、勝ちを狙えるときには、しっかり勝ちにいく気はあります。が、勝ちがすべてではない、と思ひます。



甘い考えと言われるかもしれませんが、国土館を“勝つためだけの集団”にはしたくないんです。生徒達には、新体操を通じてたくさんのかんことを学んでほしいし、仲間を作ってほしい、仲間を大切にできる人間であってほしい。そして、新体操を好きでい続けてほしい、そしてその先のご褒美として“勝利”という付加価値がついてくることが私の願いですから。

全日本での成績も現時点では喜んでもいいかなと思ひるものでしたが、それ以上に、卒業していく4年生が全日本後に“国土館で良かった”とノートに書いていたり、口にしたりしてくれたことのかんびが大きいです。そう思って卒業していく子が増えれば、少しずつ新体操への恩返しができるんじゃないかと思ひます。」

……では、最後に、今後の具体的な目標を聞かせてください。「2013年の東日本インカレは、本気で獲りにいくつ



もりです。とくに個人は、頂点はもちろん、上位独占を目指すくらいの気持ちでやっています。選手達もそのつもりだと思います。

ジュニアも 2012 年は出来すぎでしたが、2013 年はそれが当然！ と思えるようになりたいです。

また、近年の関東はどうしても東北や九州に比べると全国での成績ではやや遅れをとっていると感じるので、大学生からジュニア、キッズを含めて関東の男子新体操を盛り上げる活動をしたいと考えています。長野でやっているキッズ選手権の関東版などもやれるといいなと思いますし、今からクラブを立ち上げるころや、女子のクラブで男子部を始めたいところなどがあれば指導者の派遣などもできるように体制を整えたいです。」

(インタビュー：2012 年 11 月 25 日)

私が、男子新体操を熱心に見始めた 2010 年。その年の7月に初めて見た国士館大学の練習は、インカレ直前にもかかわらず、予想以上に静かな練習だった。厳しい言い方をするなら、かつての『男子新体操の絶対王者』である国士館大学は、すでに負けることに慣れ、あまんじることに慣れてしまっているようにも見えた。まじめに練習してはいるのだが、もっと！ という真欲さには欠けていた。絶対に勝ちたい！ という熱にも欠けていた。

山田監督の指導は熱かったが、決して選手に「強制する」タイプの指導ではなかったため、個人も団体も



ごくマイペースな感じに見えた。たとえるならば、私に、男子新体操をやっている息子がいたとして、新体操を続ける前提で大学を選べたとしたら、「勝つこと」を最優先するなら国士館ではないな、と感じた。2010 年の国士館は、そんなチームだった。

ただ、大学生の部活として新体操をやるにはいい環境だな、とも感じた。それは、山田監督の指導や、練習の雰囲気「自主性の尊重」が感じられたからだ。あのころの国士館は、「ここにいれば強くなれる」という雰囲気ではなかったが、誰かに「強くしてもらおう」のではなく、自分自身で強くそう望み、行動すれば強くなれる！ 環境のほうが、大学生には望ましいように思った。少なくとも、自分の子どもだったらここを選ぶかもしれない。そんな風にしたことを覚えている。

なんと言っても、監督の山田小太郎は、高校1年生の5月に新体操を始めたという、当時としてもかなり遅いスタートの選手だった。山田の所属していた高校



は、当時、全国でもトップクラスの力を持っていた光明相模原高校で、新体操部員は、20 人以上。それもほとんど

が中学時代から体操を経験しているようなメンバーだった。そこに運動は得意だったとはいえ、新体操はまったく初心者が入部するのは、「無謀」なことだった。「無理だと思うよ」と当時の監督からは言われたそうだが、山田は、部活紹介で先輩達の「3バック+スワン」を見たときから、新体操の虜になっていて、強引に入部した。そこからは、人の何倍も練習し、人の何倍も研究した。そして、めきめき上達し、半年後には強豪・光明相模原のAチームのメンバーになったのだ。

それだけ短期間で伸びることができたのは、山田の身体能力の高さや熱意の賜物に違いないが、もうひとつ大きな要因は、常に物事をポジティブにとらえる山田の性格ではなかったかと思う。まだ入部したてのころ、ある先輩から「お前、ロンダートへたくそだな。それでも新体操部かよ！」と言われたときでさえも、「えっ？ 今、それでも新体操部かよって言ったよな。

ってことは、この先輩はおれのことを新体操部だと認めてくれてるんだ」と思って嬉しかったというのだから。そのポジティブシンキングは筋金入りだ。

そんな山田監督だから、監督就任してから、今ひとつ結果に恵まれないときが多くても、くさったりはしない。イライラして選手達に「必死になれ」と強制もしない。かつて自分がそうだったように、「自分は新体操うまくなりたい！」という熱い思いに突き動かされさえすれば、どんな選手でも大化けする可能性をあることを、彼は信じているのだ。そして、それが人から「やらされる」のではないことが肝心なのだ、とも身をもって知っている。

よく言えば「のびのび」。悪く言えば「ちょっとゆるい」。そんな雰囲気だった国士館大学の選手達が目に見えて変わってきたのは、2011年だった。この年の新入生には、斉藤剛大がいた。2012年の全日本では3位と大活躍の斉藤だが、彼は、じつに自立した選手で、周囲からの強制はなくても、自らの目標に向かって、今、何をすべきかが分かり、実行できる選手だ。そんなしっかり者の1年生の加入で、「頑張らないとまずい」という危機感が全体に出てきたことが、変化の一因だったように思う。

それと同時に、「いつかは国士館をもう一度強くしたい」という思いを、行動で示せる選手が増えてきた。2011年に国士館の選手達にシーズンの抱負を聞いたときに、当時3年生だった篠原良太は、「自分が4年になるときは、強い国士館になりたい」と言



ったが、彼は、そのために自分がどう行動すべきかを理解していた。もちろん、自分自身が練習して強くなることは大前提だが、それ以上に、「みんなで一緒に強くなろう」という雰囲気を作り上げること、が国士館には必要だったのだ。

2012年の国士館は、まさに「みんなで強くなろう」と一丸となったチームだった。個人も団体も、そしてジュニアまでも。それぞれが自分を磨くことが、自分だけのためではなく、仲間のためにもなることを知っている。国士館はそんなチームになった。

無敵だったころの国士館を知る人達、とくにOBにとっては、今の国士館ではまだまだ物足りないかもしれない。こんなじゃダメだ、と思う人も少なくないだろう。だが、かつての栄光は、すでに失われて久しい。今の国士館は、ゼロから、いやもしかしたらマイナスからスタートしたのだ。そこから登り始めたチームが、やっと頂上を目視できるところまで来たことには、大きな意味があるのではないか。



2013年、国士館大学が、真に「頂点を獲りにいくチーム」になれるかどうか。

まさに、『勝負の年』になる。

CLOSE UP

# 山脇 麻衣

MAI YAMAWAKI

(町田 RG / 早稲田大学)



2013年1月12日、長野県ホワイトリングで行われていたテレビ信州杯に、山脇麻衣はリボンで出場していた。

いつものようにチャーミングな笑顔をふりまき、表情豊かに踊る山脇だったが、この演技には、特別な思いがこもっていた。

### 3年目でやっとたどりついた 「納得のいく終わり」

山脇麻衣は、この長野での演技で競技生活を終えることを決めていたのだ。まだ大学3年生なので、少なくともあと1年は現役を続けてくれることを期待している人も多かったと思うが、2012シーズンで競技は辞めると、彼女はかなり前から決めていたのだという。

「どうしても、学生のうちにやっておきたいことがあるので、大学生生活を1年残したところで新体操は辞めようと考えていたんです。というより、大学に進学した段階では、1年は現役を続けるとしか決めていませんでした。

それが1年目はなんだか納得がいかないまま終わってしまい、もう1年やる！ と決めて、2年生までで辞めようと思っていました。ところが、2年目はさらにボロボロになってしまって、このままじゃ辞められない！ と3年目に突入してしまいました。」

と山脇は苦笑いしながら言う。

「3年目に入るときに、2年目がダメだったのは心のどこかに、ダメだったらあと1年やればいい、という妥協のようなものがあつたからだと思ったので、3年目は良くて悪くても、絶対に最後のシーズンにする！ と決めました。

だから、2012年の試合は、どれもすごく怖かったです。とくに8月のクラブ選手権は、そこで全日本出場の権利がとれなかったら、公式試合はここで終わりになるという試合だったので、本当に怖かった。」



©Yoshinori SAKAKIBARA

しかし、山脇は、そのクラブ選手権で素晴らしい演技を見せ、見事、全日本出場を決めた。

「クラブ選手権決勝の前の夜は、明日で終わりかともとは考えました。でも、そう思ったなら、たくさんの人に演技を見

てもらえるのは、最後かもしれないんだから、思い切りやろう。こわごわやったら悔いが残る、と覚悟が決まったんです。思い切りやってミスするより、びびって小さな演技で終わるほうが絶対に悔しいと思って。」

たしかに、あのクラブ選手権決勝での演技は、いつも増して「見て見て」オーラに満ちていた。それは、「最後かもしれない」という覚悟があつたからこそ、にじみ出たものだったのだ。

### いつもギリギリ！

#### だからこそ得られた土壇場での強さ

「私は試合になると、余計なことを考えてしまうほうなんです。練習ではあまり考えずに流れの中でさらっとできることも、試合だとミスしたらどうしよう、と怖くなってしまい、緊張してミスする。そんなことが多くて、先生からはノミの心臓とかびびりと、よく言われてました。」

そんな小心者の彼女が、「最後かもしれない」という土壇場で「思い切った演技」ができた。そのギリギリの局面での底力はいったいどこから湧いてきたのだろう。そう考えたときに、ひとつ思いあたることがあつた。山脇麻衣という



選手のこととは、ずい分、小さいころから知っているが、失礼ながら彼女は「常にギリギリ」のところにいる選手だったのだ。強豪クラブ・町田RGの中で試合に出るメンバーに選ばれるかどうか、さえもいつも危ないところにいた。

「部内の試合でも、東京の試合でも、絶対いける！ と思った試合は一度もないです。」

山脇は笑顔でそう言うが、それがどんなに苛酷な状況だったかは想像に難くない。

おそらく彼女は、いつも「ここでいいところを見せないと自分には出番がない」という目に幾度となく遭ってきたのだ。結果、その勝負に負けてしまいほそ



を噛んだこともあったに違いない。

そんなギリギリガールだったからこそ、本番でのミスを人一倍怖がるようにもなってしまったのだろうが、開き直ったときの強さも同時に身につけてきた。だからこそ、最後と決めていたクラブ選手権で、

「どうだっ！」と言わんばかりの演技ができたのだろう。

2013年から採用される新ルールは、より芸術性が重視されるようになるという。単に高い難度ができるとか、技術力が高いというだけの選手よりも、音楽と一致した動き、テーマ性を伝えられる表現力をもった選手の評価が高まるはずのルールだ。

山脇麻衣は、新ルールになれば有利なタイプの選手だと多くの人が思っていたはずだ。ここで辞めてしまうのはもったいない！ 自分でそうは思わないのだろうか。

「新ルールは、新体操を楽しくさせてくれそうで、本当に楽しみです。このルールのときに現役をやっていたかった、とはちょっと思いますけど。」

### 「見ている人の心を動かす演技」がしたい！

そう。山脇麻衣の演技は、従来のルールの中では「ムダ」と思えるほどの表現に溢れ、それが彼女が成績以上に印象に残る選手たるゆえんだった。女子新体操界



きってのアクトレス。山脇麻衣をそう呼ぶことに異論はないだろう。

「私は“新体操は、人の心を動かすスポーツ”だと思っていたので。自分の演技で、見

ている人に、何かを感じてもらえたり、少しでも心が動かせたらいいな、と思ってやってきました。競技に出る以上、高い点数がほしいとか勝ちたいという気持ちもありましたが、それ以上に、記憶に残る選手でいたいと、ずっと思っていました。」

思えば小学生のころから、表情豊かな演技をする選手ではあった。が、そういう風に、自分の目指すものを明確に意識するようになったのはいつごろからなのだろうか。

「自分は体型や能力には、恵まれたほうではなかったんですが、表現力だけは認めてもらえることが多かったんで、それが嬉しくて。とくに高校生くらいからは、自分の演技を楽しみにしてくれている人もいるんだ、と感じられることが多くなって、それが励みになりました。」

評価が伴わなくて落ち込んだこともあります。が、それでも、いや自分はこれでいいんだ！ と思えたのは、私の演技を好きだ、楽しみにしてくれる人達がいたからだと思います。」

それならなおさら、ここで辞めてしまうのはもったいない！ 山脇の演技を楽しみにしていた人達の一人である私は、そう思わずにはいられない。

「そう言われるのは嬉しいんですけど、でも、自分では納得のいく終わり方ができてよかった！ という気持ちが大きいです。最後の全日本は、順位としてはよい結果は残せませんでした。が、あんなにたくさんの人に演技を見てもらえて、たくさんの人からよかったよと言ってもらえたし。大きな舞台上、いい演技で終わったことでずっとお世話になってきた先生方や親にも少し恩返しできたかな、と思います。」

山脇麻衣の演技を見ていると、おのずとそこにストーリーが見えてくる。そのストーリーが本人がイメージしているものと同じかどうかはわからないが、「ス



トリーが浮かぶ」こと自体、日本の女子の新体操では少ないので、そこに山脇の特異性があった。

「それぞれの作品に、ストーリーというかテーマはもって踊っていました。フープは、情熱的な曲なので、新体操に対する自分の情熱を表現するつもりで、ポールは…恥ずかしいんですが、“かなわぬ恋”というイメージで。クラブは、『NINE』という映画の曲を使っているので、映画にも出てくる娼婦のようにコケティッシュで扇情的な感じ。“私を見て～!”というような。リボン『ショウガール』になりきって、明るく楽しくショーを演じるように踊ることを心がけていました。リボンで着ていたレオタードは、チャイルドの子が着るようなデザインと言われたりもしましたが、私にとっては作品のイメージ通りなんです。ちょっとかわいすぎるオレンジ色も、希望して入れてもらって、とことんぶりぶりにしたかったです。」



©Yoshinori SAKAKIBARA

4種目すべてが、まったく違って見える。言うのは簡単だが、それができる選手は案外少ない。山脇麻衣はその貴重な一人だった。

「種目によって、雰囲気はまったく違うので自分のテンションを上げたり下げたりするのが、試合のときはけっこう大変でした。私は、演技するとき、気持ち



も作品に入り込めないとダメなので。試合の怖さに飲み込まれてしまうと、その作品の雰囲気はまったく入れなくなってしまって、演技もボロボロになってしまいます。」

勝っていく選手としては、それは欠点かもしれないが、だからこそ、山脇の演技はあんなにも観客を魅了したのだ、と理解できたような気がした。彼女はたしかに、フロアの上での90秒間は、まったく別の人間として呼吸していたのだ。

そんな選手の演技をもう見るができなくなる、と思うとさびしくてたまらない。そう思うのは、私だけではないだろう。せめて、後に続く選手たちの中から、山脇のような選手が出てくることを期待するしかない。

「今、新体操をやっている人達には、自分の良さをわかって、その自分の良さを生かして強みにできる選手になってほしいと思います。新体操はスポーツだから勝敗はついてしまうけれど、ただのスポーツではなく芸術スポーツだから。見ている人の思いや気持ちを大事にしてほしいです。そして、やはり、感謝の気持ちを忘れずに。新体操ってほんとにたくさんの人に支えてもらわないとできないスポーツだな、と思うので。」

### 「舞台に立つ」という夢に向かって

新体操を始めた3歳のときから、じつに18年間支え続けてきた親御さんや、9歳のときから12年間通った町田RGの先生達、仲間達の存在は、本当に大きなものだったという。

「先生には、技術はもちろん、人間性とかたくさんのことを教えていただいたと思っています。私が、将来やりたいことを見つけられたのも町田RGにいて、先

生方の指導を受けられたおかげだと思うので、町田にいなかったら今の自分はなかったと言い切れます。親は、とにかく当たり前のように私が練習に行ける環境を用意してくれた。それってすごいことだと思います。小さいころのことはあまり覚えていないのですが、干渉されて嫌な思いをしたこともあったような気もしますが、ある程度の年齢になってからは、私が決めたことには、何も言わずに協力してくれました。先生、親、仲間は自分が新体操を続けていくうえで、すごく大きな力でした。本当に感謝しています。」

もっと新体操を続けてほしい、と言い続けるのが憚られるくらいに、山脇麻衣は、清々しい表情をしていた。そして、すでに彼女は未来を見つめていた。

「中3のころから、将来は舞台に立ちたいという思いがあったんです。だから、大学最後の1年は、その夢



をかなえるための準備期間にしたいと思っています。私がやりたいのは、舞台上で新体操をやるとか、ダンスではなく、ミュージカルのような『舞台に立つ

仕事』です。そのためには、今から勉強しなくてはいけないことがたくさんあるので、本当は1年では足りないくらいなんですけど。

でも、無理かな？と思うことでも、ずっと頑張っていれば実現できることもある、ということは新体操で学んだので、きっと頑張れると思います。」

もうフロアマットで踊る姿を見ることはできないのかな？ 未練がましく聞いてみた。

「3月3日が町田の発表会なので、そこで踊ります。集団演技にも出ますし、個人も踊ります。フロアの上で踊るのはそれが最後です。次に踊りを見てもらうときは舞台！ そう決めているので。」

決意は固い。

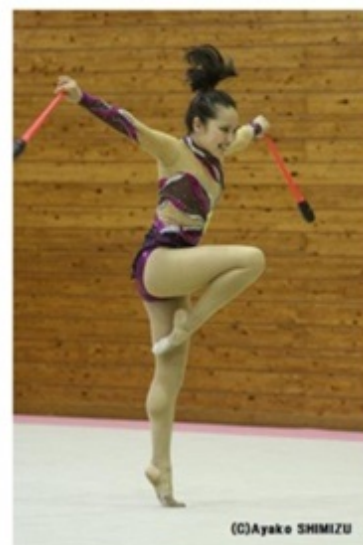
山脇麻衣は、ずっと「一番手の選手」ではなかった。いつも「一番期待されているのは自分ではない」と感じながら、新体操を続けてきた。世界に出ていく選手を目指すには、身長も低く、ずば抜けた柔軟性もなかったからだ。そのことが嫌になったことも正直あった

という。が、それでも辞めずに新体操を続けてきたのは、“やっぱり新体操っていい”と思える瞬間があったからだ。試合で踊っていて気持ちよかったり、ジュニア選手から自分の演技のことを好きだと言われたり。そんな喜びが、彼女を新体操に繋ぎとめていた。

そして、いつの間にか、彼女は「一番じゃない」ということが気にならなくなった。「一番じゃなくても認めてくれる人はたくさんいる」と感じられるようになった。そうしたら、「一番じゃない」から得られる「自由」が自分にはあるのかもしれない、と思えるようになった。誰もが期待を寄せるような選手だったら、勝ちを宿命づけられる。そして、それが苦しくなって、新体操から離れていった選手も大勢見てきた。そう思えば、自分の目指す新体操を追究し続けられた自分は、幸せだったのかもしれない。彼女はそう言った。

きっと、そうなんだと思う。そして、そんな彼女の演技を見ることができた私達も、幸せだったのだ。

(インタビュー：2013年2月14日)





**第2回**  
**男子キッズ選手権**

2013/1/12  
at 長野県ホワイトリング

**4～6年の部**

2位：松永健人（NPO ぎふ新体操クラブ）



1位：乾 蒼真（華舞翔新体操倶楽部）



3位：大野哲平（Leo RG）



4位：向山蒼斗（国士館ジュニア）





5位：安藤未藍 (NPO ぎふ新体操クラブ)



8位：吉田祥真 (華舞翔新体操倶楽部)



8位：武田大河  
(神埼ジュニア新体操クラブ)



5位：田中涼介 (華舞翔新体操倶楽部)



10位：石橋侑也  
(神埼ジュニア新体操クラブ)



7位：野口勇人 (神埼ジュニア新体操クラブ)

ベーシック賞：石橋知也

(神埼ジュニア新体操クラブ)



## 3年以下の部

ベーシック賞：宮崎 新

(BLUE TOKYO kid's)



ベーシック賞：綿谷啓杜

(ホークジュニア)



アーティスティック賞：室賀友祐

(Wing まつもと R.G.)

アーティスティック賞：  
木村熙作（舞エンジェルスR.G.）



アーティスティック賞：  
葛西麗音（BLUE TOKYO kid's）



ファイティング賞：  
赤羽拓海（福島新体操クラブ）



ファイティング賞：  
宮田 柊（町田 RG）



ファイティング賞：  
小澤龍矢（Wing まつもと R.G.）



<撮影：清水綾子>

**第15回**  
**全日本クラブチャイルド選手権**

2013/2/22~24  
at 千葉ポートアリーナ

**5・6年の部**

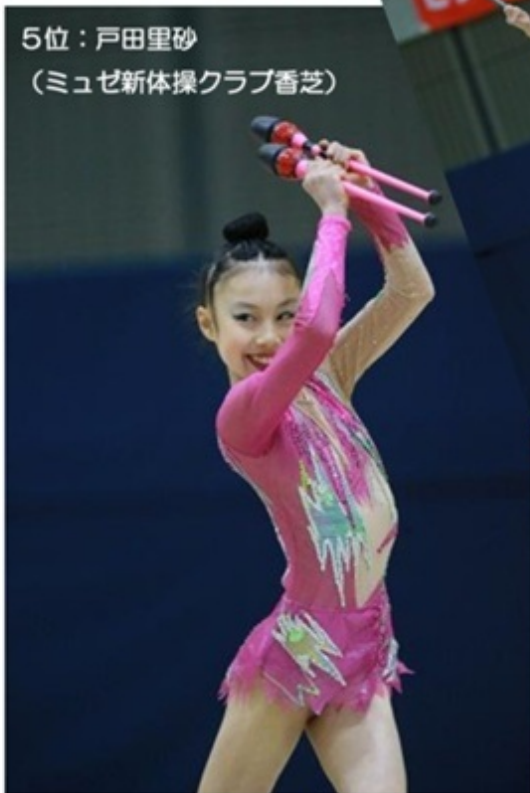
2位：奈良岡未森（アンジュ）



1位：柴山瑠莉子（イオン）



5位：戸田里砂  
（ミュゼ新体操クラブ香芝）



3位：山崎 凜  
（ファミスタクラブ 本店）

4位：島田悠里  
（ヴェニエラ RG クラブ）

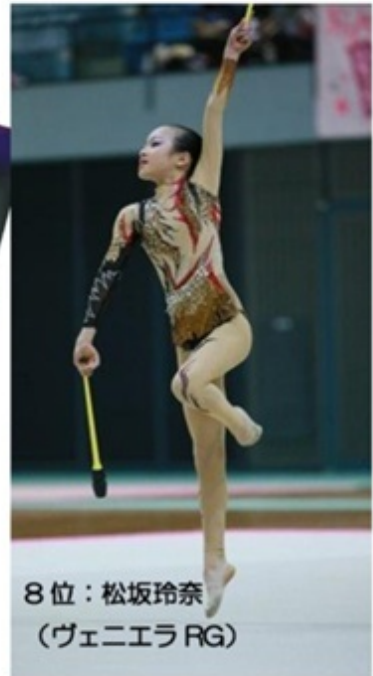




7位：梅井 優  
(アミューズ松戸新体操クラブ)

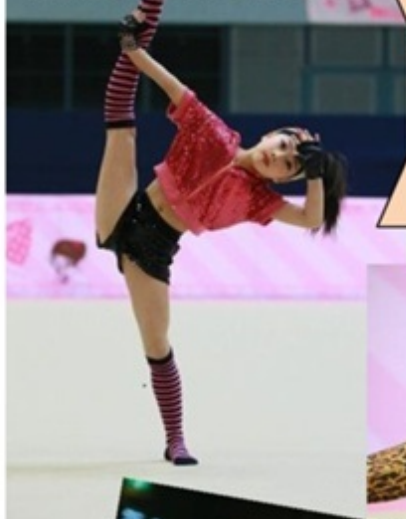


6位：海野晴子  
(アンジュ RG)



8位：松坂玲奈  
(ヴェニエラ RG)

ダンシング賞：  
中川結己奈 (With RG クラブ)



第12回  
キッズコンテスト  
入賞者  
2年生の部



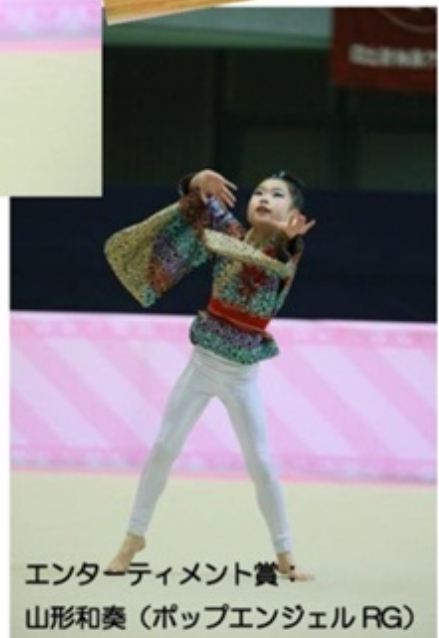
エメディー賞：  
小松さら (調布 RG)



フューチャー賞：  
尾谷ジェニファーアマラチ  
(Club O・T・A)



ベーシック賞：  
林美久虹 (I☆RG カガワ日中)



エンターティメント賞：  
山形和奏 (ポップエンジェル RG)

## 3・4年の部

2位：大島唯花 (M2三碓新体操クラブ)



1位：森田深紅 (ミュゼ新体操クラブ)



3位：稲木李菜子  
(みどり新体操クラブ)



4位：小池夏鈴 (イオン)



5位：塩谷早紀  
(沼津香陵新体操クラブ)



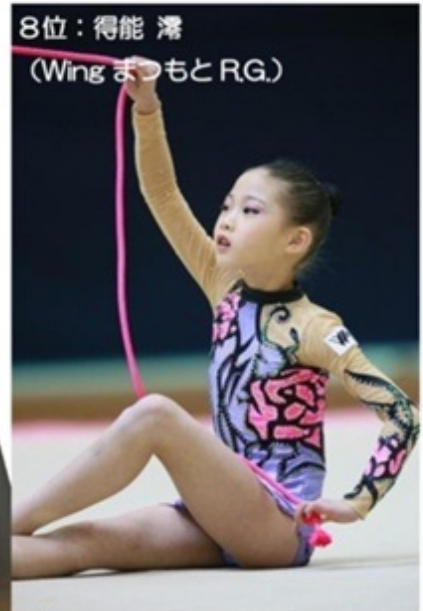
5位：柳葉麻衣 (CAC)



7位：上島珠葵  
(CAC RG)



8位：得能 滯  
(Wing まつもと RG)

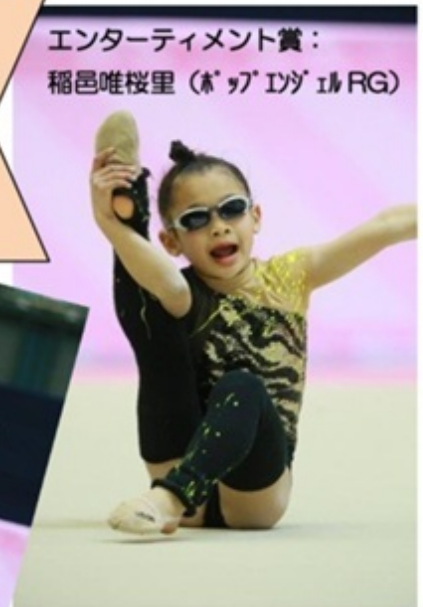


コミカル賞：  
小鳥居ひなり (調布 RG)



第12回  
キッズコンテスト  
入賞者  
1年生の部

エンターティメント賞：  
稲呂唯桜里 (ホップ・ステップ・ジャンプ RG)



ベーシック賞：鶴野菜々海  
(Twinkle Star RG)



フューチャー賞：  
喜田未来乃  
(ステップ・ジャンプ RG カガワ日中)



エレガント賞：  
廣江萌々子 (STYLEY)



<撮影：榊原嘉徳>



## 新体操魂 第3号

<http://p.booklog.jp/book/67424>

2013/2/28 発行

取材・文/椎名桂子

撮影/榊原嘉徳・大塚達也・清水綾子

表紙デザイン/小島杏奈

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/rgkeikos/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/67424>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/67424>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ